

難波西鶴と海之道

【89】

森田 雅也

前回は、四鶴『武道伝来

記』(貞享4(1687)年刊)巻三の二「按摩とらする化物屋敷」の大部分の敵討ちの話でした。

松山まで追いかけて、ようやく敵の戸塚宇左衛門の隠れ家を突き止めた軍学者堀田奥右衛門。いざ、敵討ちという時に生死にかかわる激しい腹痛に襲われます。しかし、弟子で衆道関係に

ある大津兵之助の献身的な看病によって、どうにか回復します。

そこで兵之助は平癒祈願のお礼に参詣しますが途中、屈強な若党らに守られ、船出せんとする宇左衛門一行を見つめます。多勢に無勢ながら、逃すまじと名乗りをあげ、宇左衛門と斬り結びますが、激闘の末、宇左衛門の左腕を斬り落としながらも、自らも左手首を失います。

ところが、宇左衛門は若党らに守られて舟に乗り、呼び返す兵之助を残して、沖に消えます。兵之助はこの事件を、未だ金快してない奥右衛門の耳に入れまいと一人治療に専念し、顔を見せない兵之助を心配して屋敷を訪れた奥右衛門の前でも、ひたすら隠せうとしますが、ついにはばれてしまい顔末を白状。奥右衛門は涙に深く沈みます。

茫然自失となった奥右衛門でしたが、ますます2人で死ぬ決意を固め、主家に助太刀を許可された兵之助に逆に励まされ、2人で敵討ちの旅に出かけます。探案の末、宇左衛門が但馬出石のある寺に潜伏しているとの情報を得て、2人は隣

けが乗り越え本懐遂げる

村に仮住まいして、機会を待ちます。

初雪の日、2人はついに宇左衛門一行を捉え、これも激闘の末、兵之助が宇左衛門を斬り伏せ、最期は奥右衛門がとどめを刺し、本懐を遂げます。敵討ちを見事に果たした奥右衛門は、豊後に帰り再び武名をあげ、兵之助も伊予で名高を得ます。その後2人は「万里」を隔てて交遊したとのことでした。

これも九州豊後と四国、兵庫但馬を結ぶ話ですが、西鶴はこのような遠く離れた地理観を「海之道」から得たのでしょうね。次回、九州を総括します。

(関西学院大文学部文学言語学科教授)

奥右衛門と兵之助